

団塊ボーイズ

2007(平成19)年12月25日鑑賞<角川映画試写室>

★★★★



監督=ウォルト・ベッカー/出演=ティム・アレン/ジョン・トラボルタ/マーティン・ローレンス/ウィリアム・H・メイシー/レイ・リオッタ/マリサ・トメイ/ジル・ヘネシー(ウォルト ディズニー スタジオ モーション ピクチャーズ ジャパン配給/2007年アメリカ映画/99分)

……これは、タイトルをただで観たくなる映画！ 夢と希望を失った4人の中年男たちが今目指す西海岸へのツーリングは、計画ナシ、ケータイなしで再びワイルドさを取り戻すための自由な旅。ところが、現実とは……？ やっぱり挫折、所詮お前たちでは、と思ったら、意外や意外な展開に……。もっとも、こんなお楽しみは映画の中だけにしておいた方が……。

日本向けタイトルだが、若干誤差あり……？

私が2008年10月10日に北京電影学院で「坂和的中国電影論」の特別講義をした時、1つ困ったのは「私たち団塊世代は……」というフレーズが中国人には全然通用せず、中国語に翻訳できないこと。「団塊世代」は、作家の堺屋太一氏が命名した言葉であることは日本ではよく知られているが、中国はもちろんアメリカにもその同義語は存在しない。

この映画の原題は「WILD HOGS」だが、これは中年4人組のチーム名。「WILD」はもちろん野生、つまり彼らが今最も失っていると自覚しているため、逆にそれへの願望が強いもの。そして、「HOG」とはブタとか欲張りという意味だが、この映画を観たある人のブログによれば、同時に大型バイクも指しているらしい。

日本の団塊世代は昭和22年から24年生まれだから今60歳前後の世代。しかし、この映画の中年の主人公4人は50代前半。したがって、団塊の世代という言葉でくるのは若干誤差があるが、精神的な飢餓感とかこの映画でみるような、やることがハチャメチャという意味では、たしかに日本の団塊世代と共通点がありそう。ちなみに日本

では、団塊世代の7、8年後輩が一番おとなしい世代……？

まずは自己紹介から……

この映画のテーマは、チラシにあるように、「人生は一度きり。泣いて、笑って、ジタバタしようぜ」ということ……？ したがって、映画は、まずはそんな風に考えている4人の中年男の自己紹介から。

①ウディ（ジョン・トラボルタ）は実業家で美しい妻をもった誰もが羨む地位の男らしいが、今は妻には逃げられ、会社は破産というお先真っ暗な状態。

②医者ではなく歯医者だということに劣等感をもっているダグ（ティム・アレン）は、仕事に追まわられて自由な時間をもてないうえ、ダイエットによるストレスを溜め込んでいるため、フラストレーションの爆発寸前……？

③1年間だけという約束で小説を書くことを妻から許されていたボビー（マーティン・ローレンス）は、1年後の今才能のないことを思い知らされただけで、明日からはとにかく何でもいいから働いてくれと急かされ、粗大ゴミ同様の扱い。

④パソコンおたくのダドリー（ウィリアム・H・メイシー）はロマンティックな恋を夢みているが、元来口ベタな彼にはそれは到底ムリ……？

そんな四人四様のダメおやじぶりが1人ずつ自己紹介されていくが、こんな姿は日本でもよく見かけるもの……？ 中年男たちがいかに少年の頃の夢を失い、失意の中で日々の営みを続けているかという実感と共感がじわじわと……？ もっとも、それだけではこの映画をつくった意味がないから、この導入部が終わると、いきなり弾けてこなければ……。

西海岸へのツーリングの説得力は……？

現代人、とりわけ仕事や家庭への責任感の重圧にあえいでいる中年男たちが最も失っているのは自由。そして、彼らの自由を奪っているのは、出勤時間や予定であり、その道具としての手帳やケータイ電話……？

そこで今ウディが提案したのは、計画なし、予定なしでとにかくひたすら西海岸に向けてバイクを走らせること。肌に風を感じながらひたすら走る、それがライダーたちの基本だというわけだ。これに対して最初に尻込みしたのは、歯科医のダグ。だって、ぎっしり入っている(?) 予定をどうするの、と考えたのが当然だから。ボビー

も妻が許可してくれないからと遠慮済み。しかし、パソコンおたくのダドリーは行きたそう。

そんな雰囲気の中でウディは、「ワイルドに行こう！ 失ったものを取り返そう！ 計画なんかクソくらえ！」と説得（煽動）した甲斐あって、今は4人そろってバイクにまたがることに。そのうえ、今は調子に乗って（?）、ケータイなんぞクソくらえ、とばかりに投げ捨ててしまったが、こいつらホントに大丈夫……？

弱い者には強く、強い者には弱く……？

私は弁護士登録以降一貫して交通事故の保険会社側の示談事件を処理してきた。そこで弁護士に要請されることは、被害者がヤクザなどに頼んで無理難題をふっかけてきた時、毅然と対応すること。私はそんな要請に応じてやってきたつもりだが、最近では弁護士でも保険会社の担当者でも、弱い者には強く、強い者には弱くという傾向が強くなっている。つまり、被害者側が無知でかつ何の要求もしてこなかった場合は低額な金額で納得させ、逆に被害者側が強硬な手段に出てくるとビビってしまい、その要求額を認めてしまうというものだ。しかし、いうまでもなくそりゃ最悪の処理。

ウディたちの前を通りすぎていった20~30台のバイク軍団は、これぞワイルド、これぞ大人のライダーというカッコいいものだった。しかし、今彼らが休憩している酒場に入ってみると、何と彼らは刑務所あがりで構成されたバイク軍団「デル・フエゴス」の荒くれ男たちで、そのリーダーがいかにも凶暴そうな大男のジャック（レイ・リオッタ）。こりゃヤバイ。そういう輩とは関わりあいをもたず、さっさと逃げ出すに限る。そう考えた小心者の（?）4人だったが、結果は最悪。

ジャックのバイクを誉めてしまったばかりにダドリーは自分のバイクとの交換話に乗せられて、マンマと相手の手のうちにはまってしまうことに。そのため、今ダドリーは、ウディのバイクのサイドカーに乗せてもらうというみじめな姿に。弱いものには強く、強い者には弱く、ではダメなのだが……。

そこまでやるか……？

4人の中ではやはりウディが一番アイデアマンでリーダーシップを発揮するタイプらしい。みじめな気持とみじめなスタイルでデル・フエゴス軍団と別れ、再び西海岸へのツアーに出発したものの、どうにも腹の虫がおさまらないため、ダドリーのバイ

クを取り戻そうと提案したのはやっぱりウディ。ところが、他の3人はビビってしまい、ノーサンキュー。そこでウディは単身奴らが騒いでいる酒場に戻り作戦を練ったところ、あったあったいい方法が……。さて、それは……？ ウディはペンチを持ち出し、秘かに奴らのバイクの燃料パイプを切っていったが、さてその効果は……？

ウディがエンジン音を轟かせながらダドリーのバイクにまたがって逃げていく姿を発見したジャックらは、直ちに自分のバイクに乗って追いかけてしようとしたが、その時、火のついたタバコをポイと捨てたのが運の尽き。バイクはもちろん、地上に漏れ落ちていた燃料に伝わった火は建物にも及び、酒場は大爆発。そこまでやるか……？

予想以上の効果にウディは大満足だが、デル・フエゴス軍団からの報復が怖いのは……？

マギーの住む町では大歓迎！

その後も4人の旅にはいろいろなハプニングが続くから、その面白さを存分に楽しみたいもの。今やっとの思いで砂漠を越えて(?) 次の町にたどり着き、マギー(マリサ・トメイ)が営むレストランでしこたまビールを飲んで生き返ったのはいいものの、なぜか住民たちはそんな4人をビクビクしながら眺めていた。そしてそれは、彼ら4人を「デル・フエゴス」の一員だと誤解していたためらしい。ウディやボビーはまだしも、いかにもひ弱そうなダグやダドリーを見れば、そうでないことは一目瞭然のはずなのに……？

それはともかく、長い間恋愛運から見放されて、独身生活を続け、憧れのマドンナを探しているダドリーが、このマギーに一目惚れしたところから、この映画後半の物語が大きく動き始めることに。4人組がデル・フエゴスの仲間ではなく、逆にデル・フエゴスたちをこてんぱんにやっつけてきた「中年の星」だと知った町民たちはこぞって4人組を英雄扱いに。それは、これまでデル・フエゴスを取り締まることができなかった意気地のない保安官たちも同じ。

またマギーの目にも、ダドリーは弱々しそうなながらも、それなりの男に見えてきたから不思議……。もっとも、デル・フエゴス軍団をギャフンと言わせてきたと豪語し、ダドリーのバイクを取り返してきたはずのウディだけはなぜかそそくさとし、一刻も早くこの町を出発して西海岸に向かおうと焦っていたが、それは一体なぜ……？

これぞ中年男の意地だが……

ダドリーとボビーとダグが町民の歓迎を受けて楽しむ中、ウディは仕方なくそれにつき合うことに。そんな中、他方では爆破された酒場の後始末と破壊されたバイクの補充を終えたデル・フェゴス軍団の4人組に対する追及がはじまり、遂にこの町にはデル・フェゴス軍団のバイク音が鳴り響くことに。

ジャックの大音声は「4人組を出せ」ということ。そして町民には、「4人組を匿ったら大変なことになるぞ」という警告が。さあ、4人組とりわけウディはどうするの……？ 保安官は……？ マギーは……？ そして4人組をヒーローと考えていた町民たちは……？ 4人組の最初の方針は「強いものには弱く……」というもの(?)で、マギーのレストランに隠れたまま時間の経過に期待すること。それは保安官もマギーも同じでそりゃ仕方なし。

ところが、ここで勇氣ある決断をし、デル・フェゴス軍団との対決に名乗り出たのが、多少状況を誤解している感もある4人の中で一番ひ弱なダドリー。ちなみに、そこにはマギーにええカッコを、見せなければというナイト精神もあったかも……。しかし、現実には厳しく、ダドリーはす巻きにされてロープでぶら下げられることに。

さあ、これを見て3人はどうするのだろうか？ 果たして決起するのだろうか……？ それともダドリーを見殺しにしてすずごと逃げ帰るのだろうか……？ この映画に関しては私の評論はこれで終わり、その後の「これぞ、中年男の意地！」という戦いぶり(?)はあなたの目でしっかりと。

カメオ出演のピーター・フォンダをお見逃しなく！？

『モーターサイクル・ダイアリーズ』(04年)は若き日の医学生であったチェ・ゲバラがバイクで南米を旅行する姿を描いた面白い映画だったが、バイク映画の金字塔はピーター・フォンダ主演の『イージー・ライダー』(69年)。あの当時のバイカーやハーレー・ダビッドソンは反権力、アウトローの象徴だったが、今やバイクでのツーリングは多くの中年男たちのリッチなお楽しみに。

ウディたち4人組も、趣味として週末のツーリングを楽しむ程度だったら、この映画のような大変な目に遭うこともなかったのだが、それでは刺激がなく、何のための人生かわからないと思ったのが彼らの運の尽き……？ と思ったら、この映画は意外

な結末に。そしてそこには、何とあのピーター・フォンダがカメオ出演し、ある重要な役割を果たすから、それを決してお見逃さないように……。「人生は一度きり。泣いて、笑って、ジタバタしようぜ」というキャッチフレーズがピッタリのこんな映画を団塊世代の親父たちは是非鑑賞し、明日へのエネルギーとしたいものだ。

2008(平成20)年1月4日記

第4章

ひとつとして同じ人生などない

映画「オヤジ」が名付けた日本の「団塊の世代」は大衆定年時代を過ぎ、これからが力量の見せどころ。団塊世代という言葉が思いやめられないという点も、この映画は、おかしな上、主人公たちは五十歳代前半だから少し年齢偽装だが、その元氣とハカシ加減は完全に同類！
今四人のオヤジたちはカシコよくハリーに乗り西海岸へのツーリングに出発したが、内心は各自問題を抱えヤケクソ気味。彼ら

4人の「オヤジ」たちに続け！



団塊ボーイズ

あすから梅田ブルク7で公開

の口癖は何の予定もなく、誰からも誘われぬ自由気ままな旅。手帳もケータイも捨て、体に風を感じながら

がらひたすおまのオヤジ。ターというわけだが、確かに理想はその通りだが、彼らの前途に待っている現実

？ 最初のおカマとの出会いはお笑いを済むが、刑務所あがりのバイク集団との

遭遇と対決は一本して手裏剣に。本来の任務道とは正反對の「強盗を助け、弱盗を懲らす」風潮

が繰延している昨今、「七人の侍」なら四人の出陣男は果たして運命の出会いをしたマドンナが住む町の救世主になりうるのだろうか。

この映画の二〇〇七年全米興行収入トップテン入りは、難しい理屈は不要、男は「うでなぐちや」と元氣いっぱいに世を回れめからだが、それはあくまで映画の中でのこと。実生活で彼らと同じように羽目を外すと本当はヤバイ。しかし、今は小でく納まってい

るあなたも、心の底では自出とロマンを追い求めている少年の姿。しばし四人のオヤジとごもにあなただの夢を通してあげよう。

大阪日日新聞 2008(平成20)年2月8日